

木田宏教育資料オーラルヒストリー（6）
岐阜大学教育学部附属カリキュラム開発研究センター記録

国立教育研究所時代

（平成 10 年 1 月 31 日実施／『木田宏教育資料』第 5 巻収録）

国立教育研究所時代

【木田】 昨年は思いがけない、全く素晴らしいものを作ってくださいまして、本当にありがとうございました。全く光栄です。最大の勲章です。

【後藤】 今日は学外の参加者として、前の『日本教育新聞』の編集局長の有菌さんがみえています。

【有菌】 よろしくお願ひいたします。

【後藤】 それから、県教育委員会管理部長の芝田さんです。

【芝田】 芝田です。どうぞよろしくお願ひします。

【後藤】 文部省から来ていただいております。それから、教育センターの所長の服部先生です。

【服部】 よろしくお願ひします。

【後藤】 教育研究所連盟と関係があるということでお呼びしました。どうぞよろしくお願ひします。

【服部】 どうもありがとうございます。

【木田】 それでは、最初に資料について申し上げておきます。今日の日付の入った「教育研究所時代」という資料で、大体お話ししようと思っております。そして、あとお配りいたしました「教育と医療」は、研究所を終えた直後の講演で、研究所にいた 7 年間の教育についての私なりの理解で卒業論文みたいなものです。

その前に、「教育改善における教育研究

の役割」という昭和 59 年 9 月のペーパーが入っております。これは、研究所の終わりの頃に、IEA という国際教育到達度評価学会のシンガポールの大会で話したことを翻訳したものです。翻訳して研究所の紀要に載せたということは、もともと日本語の方が先に出来てるわけで、英語の方が翻訳ですが、それをもう一遍戻して載せたもので、研究所で“教育と研究”ということを考えてものでございます。

それから、もう一つ、「学習指導要領・入試と教師の教育責任」というのをお配りしました。これは『学校経営』に書きました。これは、学校の先生が教えることについては自分が責任の主体であるにもかかわらず、ひとのことを言ってるように受け取れて、少しむかむかしたものですから、そのことを書いてあります。「教育と医療」、「教育改善における教育研究の役割」というのは、もし何かご意見があれば明日の機会にでもお願ひします。

【後藤】 明日はグランドホテルの方で開催させていただきます。

【木田】 国立教育研究所時代は 7 年間でもございましたけれども、研究所の所長というのは何かわからないうちに過ぎちゃったという気がいたします。（笑）

「教育研究所時代」のメモは思い出しながらワープロへ打ち込んだものですから、整理その他、必ずしも整然とできているとは思いません。まず、研究所というものが

どういう位置づけのものとしてあったか、少しお話をしてみようと思います。

ここの図書館に入っていると思いますが、「国立教育研究所 10 年の歩み」とか、「国立教育研究所の 30 年」という資料があるはずです。大体それを書いてあって、そこから拾ったものです。私は昭和 53 年から 60 年まで、7 年間研究所の所長を務めさせていただきました。私にとって 1 ケ所のポストの在任期間としては、これが一番長かったのでございます。

しかし、振り返って、何をやってたかといったら、何も出てこないですね。(笑) 際立った記憶がない。それで、仕方なしにぼつぼつと古い歴史を見ながら思い返して、研究所というのは何だったろうかということ、順不同で書き出したものがこれでございます。

研究所をいろいろ大事に考えるというのは、実はアメリカの教育使節団の報告書から始まっていると考えていいと思います。日本の教育を、教育使節団がいろいろと批評してくれました。“一定量の知識を与えること”という考え方が画一化の基本になっているし、それが日本の教育では能率の尺度だと思ってきたようだけれども、それが問題じゃないのかという書き方がございまして、“批判を寛容しない教育制度は進歩の手段を自ら捨てたものだ”と述べています。教育制度を考え、教育の運営を考える時に、批判ということを常に考えないといけない。これは、アメリカの使節団の報告書の総論のところに出てくる発想です。

私がいろいろなところで引用する言葉ですが、教育使節団の報告にこういう表現もあるのです。“試験問題の研究は、批判の機関と、教育研究の中心機関との創設を必要とする。”こういうことを教育使節団の報告書にはちゃんと書き込んであるのです。

県の方がみえているようですが、この

県も多分そうだったと思いますけれど、初期に、教育委員会ができる前ですが、県の教育部には調査課ができていないはず。私が行きました千葉県でも調査課というのは早くできておりました。それから、やっぱり各県に研修所があったかもしれませんが、それをできるだけ早く県は教育研究所に切り換えるというようなことをやってくださったはずでございます。

既に昭和 21 年の 8 月に教育研究全国協議会というのが開かれまして、県の関係者、教育研究の関係者等が数百名集まったというような記録がございます。それが第 1 回、それから第 2 回、第 3 回が昭和 23 年の 6 月なので、1 年に 1 回ずつそういう教育研究を充実して、日本の教育内容についての目を光らせないといけないという気運を作ったのです。ですから、県の方が先に調査課を作り、研究所ができたわけです。

ところが、国立の教育研究所はどうなったかと言いますと、国民精神文化研究所というのが書いてありますが、歴史をたどりますと昭和 7 年に設置された国民精神文化研究所というのがそもそもの始まりです。この時には、西田直二郎先生とか、久松潜一先生、西晋一郎先生とか、私ども学生時代の大御所の名前がこの研究者の名前にずらっと入っておりまして、主として中等教員の再教育ということにフォーカスを当てて、こういう大先生を精神文化研究所に揃えたようです。戦争が盛んになりました昭和 17 年に、国民錬成所というのができました。別々の組織だったのですが、終戦の時期が近づいてきて、教学錬成所という組織に昭和 18 年に変わります。初代の所長は、文部大臣をやった橋田邦彦氏です。

やっぱり教育を考える時に、そういうものの発想、理念ということ強調して取り扱っていくという姿勢が、当然戦時中でもあったから起こったわけですね。戦争に負

けて、すぐ教学錬成所でもあるまいというので、教育研修所という一番当初からの無難な名前に切り替わったわけです。ですから、この教育研究全国協議会等をやってる時に、もちろん研修所の所長の務台理作さん、それから所員の宗像誠也さん、こういう方がおられまして、全国の教育研究の体制を作るべく旗を振っておられたけれども、研究所になったのは地方の方が早くて、国立の研究所が一番遅れたのです。

そうして、教育刷新委員会の第1次の建議、これは昭和21年の12月27日です。この第1次の建議で、五、六項目大きな方針が提示されました。例えば、教育の地方分権であるとか、学校制度の改革であるとか、そういうことを取り挙げておりますが、その中に、その教育委員会制度と同じ重さで教育に関する調査研究の重視という項目が入ってる。そして、各ブロックに教育研究所を作る。それから、また、教育委員会ができる。教育委員会と全く同列に、教育研究所というのが、この教育刷新委員会の第1次建議には書いてあるのです。

そして、日常の教育活動に対するウォッチングの目を育てていって、反省を加え、改善をしていくということで、教育研究をやらなさいといけなさい。その気運でずっと走ってきまして、昭和24年6月だったと思いますが、国立教育研究所に切り替わったわけです。

初代の所長が日高第四郎氏。これは2年ほどだったでしょうか。天野貞祐先生が文部大臣になられた時に、日高第四郎氏は引張られて文部次官になりましたので、そのあと研究所の所長をやられた方は村上俊亮氏、東京学芸の学長をやられた村上先生です。この方が2代目でやってらして、東京学芸の学長にぼんと持っていかれちゃったわけです。そこで、3代目が関口隆克さんという方が所長になられ、数年おやりに

なったと思いますが、大体この3人で15年ほどおやりになったはずですよ。そして、皆さんのご推挽で、本格的な教育研究所長を迎えないといけなさいといふので、昭和38年か、9年頃でしたかね、平塚益徳先生を九大から迎えた。

そして、教育刷新委員会のお偉方が言ったような理念で教育研究所を充実しましょうということ、平塚先生が一生懸命になってスタッフをお集めになったのです。それが、私が行く前の前史で、平塚先生は昭和38年頃から昭和53年の半ばまで、15年間所長をおやりになりました。空飛ぶ所長とかっていう名前を貰われたらしいけれども、(笑)日本中講演をして回って歩かれて、いろいろとご指導になったわけです。

私は、そのあとへ入ったものですから、ちょっと怒られましたね。当時文教では平塚先生が神様みたいな存在になってて、おまえはああいう大事な先生を引き下ろして、こともあろうにおまえがあとに座るとは何事だと言われました。(笑)

まあ、一方では神様みたいにおっしゃる人もあるけれども、15年やると大概にあるカラーができるから、そろそろ時期をみて、次の人を考えた方がいいと思って、恐る恐る平塚さんに話をしてみたら、「おまえが来るんなら辞める」と、こうおっしゃるのですよ。困っちゃいましたね。(笑)

そして、それでもまあしょうがないなあ。まあ、やっぱり一つの気運を変えるのに、とにかく辞めてもらう一つのチャンスかもしれないから生返事をしたら、そういうことになってしまったわけです。(笑) そうしたら、当時自民党のタカ派から怒られましたね。「おまえはああいう立派なシンボルの人を辞めさせておいて、おまえがあとに入るとは」ってということで、もう。(笑)

そして、行きましたら、それは見事に平塚さんがいろいろな人を集めていられたか

ら、「今度は妙なのが来たな」というので、
どんどんと大学へ帰っていかれるわけ
ですよ。それで、これはちょっと「いや、弱
ったなあ」とは思ったけれども、例えば成
田克矢さんがおられましたね。東大の教授
にずっと帰られた。あと次々と2,3人皆、
金沢へ行ったり、九大へ行ったり、それ
から奈良教育に出ていかれた。若い方々
も、異動が起きました。

平塚さんから、今度は本当に怒られま
してね。「おまえは、わしが折角集めて
きて、教育所のスタッフもしっかり充実さ
せたとしたら、みんないなくなって、お
まえ、そんなにほいほいって外へ出し
ていいのか」って言われたのですが、
(笑)何をやったらどうということに
なるのかというのがわからないもので
すから。「はあっ」って言って、これ
もうお叱りとご注意を聞きながら、
ちょうど、昭和54年でしたけれども、
30周年を研究所が迎えるということ
になったわけでございます。

その当時の教育研究所というのがどう
いうことになっていたか、皆さんにこ
のこを特にご説明する必要はないで
すが、平塚先生が如何に拡充してこ
られたかということを一応見ていただ
くのでもいいかなと思ひまして、その
記憶を呼び戻すという意味で書きた
す。昭和54年度の研究所のスタッ
フは103名。事務方が15,6名です
から、教育学部に近いような大勢力
ですね。そうして、私のようなのが
入ったものですから、次長というの
は途中で私がお願いして、研究者
職の人を迎えたいと思ひ、次長とい
うポストを作りました。企画調整官
というのもあとでできたのですが、
4つの研究部と指導普及部と科学
教育センター、図書館、庶務部、
こういう構成になっておりました。

企画調整というのは、もともと国の
教育研究所が地方の教育研究所等に
いろいろと指導・助言を与えるとい
う体制が必要だと

いう姿勢を持っていたものですから、
そういう形のもので残ったわけでは
ない。それが、企画調整官と指導普
及部で、指導普及部というのが当
初からの教育研究所の組織で、調
整官というのがあとで加わった新
しい、これは最近の流行りの言葉
です。最近と言っても、もう私が
行きました頃に、こういう官職を
付け加えてもらったのです。その
ことは、あとでまたお話をしてい
こうと思ひます。

研究所がどういうふうになっていたか
と言いますと、第1、第2、第3、
第4と、そして第5部を変えた科
学教育センターと、そこへ指導普
及部がある。大体6部の体制だ
ったとご説明できると思ひます。

第1は、教育史、教育思潮、そし
て各国の教育の比較研究です。比
較研究という言葉が、どうも比
較になってない、それぞれの国の
理解だなあというふうに思ひ
ますけれども。(笑)比較研究とい
うターミノロジーはありました。
一番皆さんよくご存じの佐藤秀
夫さんとか、それから手塚武彦
さんですね、これはフランス教
育でしたね。それから天野正治
さんはドイツ。こういう各国の
教育制度に非常に詳しい方が
いらっしやいましたし、日本の
教育史が、5室のうち二つ日本
の教育史だったと思ひます。

第2部が行政・制度関係でして、
市川昭午さんとか、その前に大
阪大学を出ました菊池さん、そ
れからあとで入ってきた牟田
さん、それからそこへアジア
教育というのがあります。ア
ジアはどうも欧米とくっついて
なかったとみえて、離れてお
りました。しかし、立派な阿部
洋さん、弘中和彦さんという
なかなか立派な研究者がお
られました。

それから、第3番目が心理学の
関係で、主原さん、それから永
野重文さん、野島さん。野島
さんは福井へ出られたと思ひ
ます

が、そういう方々が教育心理の部におられました。

第4がカリキュラム。木原健太郎君、これは私の高等学校の同級生です。それから、ここは何かばらばらでしてね。何か内容をやってるみたいだったけれども、産業教育というのがあるとか、社会教育があるとかっていうので、教育内容ということで雑多に入っておりました。

科学センターが、これが一番まとまっております。大橋秀雄さんがセンター長で、そして小島繁男さんだとか、沢田利夫さん、芦葉浪久さんだとか、なかなか、それぞれ仕事のできる方々がここはおられました。それで、事実、科学センターが一番活発に日本の国立教育研究所としての仕事をしておられたなあと思っています。

ですが、この構成は当時でございまして、私が在任中大体この通りだったのですが、あと相当大幅に変わっているようです。私も細かいことを、その動きを知っておりませんが、私の次に所長をやってくださった鈴木勲さんがかなりこの定員削減の中で一生懸命頑張って体制を整えて下さったようで、現在の状況とはかなり離れているということだけはご留意いただいて、今のシステムをもしリファーマされるのであればご覧いただきたいと思えます。

指導普及部というのがもう一つありまして、ここには大野連太郎さん。この人は最近まで園田学園女子大学、尼崎にある大学で、長くそちらへ行かれました。それから、アジア地域教育協力。これは、平塚さんが大変骨折られて一所懸命力を入れたところでも、その人が平塚さんの懐刀みたいにして入ってきて、平塚さんが海外に出張する時には必ず小泉さんが同行するという、そのサポーターでおりました。それから、今は、

渡辺良さんという、若いけれども熱心な人がいます。私どもの時には、その上に金谷敏郎さんがいて、今は尼崎の、その大野連太郎氏と一緒に大学にいて、国際関係で仕事をしているようでございます。大体こんな構えになっておりました。予算はもう忘れちゃったけれども、予算は後でだんだんお話ししますが、人件費の他は本当に僅かの経費でございました。

国際協力活動として、そこにOECDの教育研究革新センター、CERIとの付き合いがあるとか、国際教育到達度評価学会、IEAとの関係があるとか、アジア地域教育革新事業(APEID)との関係があると記してあります。これは組織としてこういうつながりのことを考えて対応していたというだけで、国際協力については、別途あとの方で説明申し上げます。

何もわからないのが所長にまいると、いろいろと思いがたったことだとか、今記憶に残っていることがあります。一つは研究者の人事ですが、なるほど研究者っていう方はそれぞれ人と人とのつながりで集まっておられるなあと。平塚さんが辞めて、私が入ったら、さっさと出ていく研究者がおられるわけです。平塚さんが大事に思って連れてこられた人がみんな出ていくものですから、(笑)平塚さんが心配をして、「おい、おまえ、そんなにうんうんって人を出しちゃって大丈夫なのか」って、「折角集めたのに」と、こういうふうにご不満でありました。しかし、研究所は、その当時大雑把な見積もりで、国立学校の教官当たり積算公費の半分ぐらいしか積算公費が出てない。それはひどいですよ。

教育学は人文と理系の半分のところまで積算公費を高めたのです。そうすると、国研は人文よりももっとひどいのですから。だから、ちょっと考えたら、大学の方がいいわと、こう皆さんがお考えになるのは当た

り前です。国の人文系の研究機関というのは、本当に待遇がひどかった。だから、庁費を払ってしまうと、研究費はほとんどゼロになるような感じです。だから、本当は私も、研究者が出かけていくのを、「いや、こっちの方がいいですよ」と、お義理にも言えなくって、「ああ、そうですか」「ああ、そうですか」「では、どうぞ」と、こう言ったわけです。

しかし、同時に、それはやっぱり15年かかって平塚先生がお集めになったスタッフを、やっぱり少しずつ空気を変えろという意味では変えた方がいいんだなあというふうに思って、まず口説いたのが広島横尾壯英さんです。で、行きましてね、「すみませんが」って言って、一生懸命、横尾さんに来てもらうために、原田種雄さんの後の次長というポストを用意したのです。どうしても、研究所員との間で、私との距離がありすぎる。なんだかんだと言ったって、そのフィーリングの上で距離がありすぎるから、横尾先生に全部取り仕切ってやってもらう他ないなというので、まず横尾さんに来てもらいました。

それから、日本の教育史を考えて、日本の教育思潮というのは江戸で切れてる。そして、明治維新からは西洋の教育思潮が入ってくるわけです。

そうすると、明治以降の日本の教育とはどこへつながってるのかと。日本の教育というのは、これは歴史で見てもそうですが、明治でみんな切れてしまった。そしてまた戦後で、またくるっと回転してると見れるけれども、本当はそんなものじゃないはずで、ずうっと継続してるはずだ。この継続をずっと考えてくれる人が、日本の教育史を考えてくれないと困ると思ったものですから、どうも教育学の世界でちょっと思いつかなくて、一生懸命になって日本思想史の方々を探しました。しかし結局、お願い

できませんでした。

研究所でいろんな仕事をしてみまして、どういう研究が行われているかというのは、それぞれの方がみんな自分で好きなことをやってるとするのが正直な印象です。そうしますと、研究所というのは何のためにあるのかという問題をどうしても考えてみないといけない。いろいろ仕事を通じて、所員皆さんの話を通じて考えたのは、これは、日本の教育史というのは研究所でやらなければやる所がないかもしれない。研究者の方々がそれぞれ自分のお好きな研究をやられてるとすると、やっぱり維新資料史のようなものは東大の資料編纂所で作ってる。ああいうものが日本の教育史でもやっぱり要るのじゃないのか。だから、そうとすれば、国立教育研究所がやるべき第一の仕事は、日本の教育史のその資料編纂のようなことをやらないといけないのではないだろうか。

ところが、これが、日常の仕事としては、私のところに一つも引っかかってこないのです。もっと目の前で、直前に忙しいことが役所からも言ってきます。しかし長期の注文があるわけじゃない。ほっとけば何もしなくても終わってしまう。ただ、一方では、その平塚先生はご在任中から、ちょうど「日本近代教育百年史」を作っておられました。10何巻でしたか、大きなものです。出版については研究所の経費では間に合わないものですから、東畑精一先生を頼りにして、お金を集めて作ってらしたのです。しかし、あれは研究所というものがあるという基本のレゾンデートルに近い仕事ですから、恒常的な体制を必要とすると思えます。

あとは、その国際関係を除きますと、研究者が自分のお好きなことをやっていらっしゃるわけです。「あなたはどんなことをやっていらっしゃるんですか」って、いちい

ち最初聞いてまわったのです。そしたら、僕は今でも忘れませんが、心理の若い人のところへ行ったら、「いや、遅進児の教育研究をやっています」って言うのですね。なかなかうまく追いついていけない落ちこぼれを、どうやって教育するかということをやっていますと。それはもう大変ありがたい。で、聞いてみたら、「ところが、所長、遅進児という材料を貰おうと思って学校へ行くと断られる」って言うわけですよ。

(笑)それで「遅進児の教育を一生懸命研究してるけれども、材料に困るのです」と言うから、「そんなのいっぱいいるじゃないか。塾へ行ったらどうだ」って言ったわけです。(笑)塾へ行ったら、落ちこぼれっていうのを一生懸命拾う塾の先生がいるだろう。そしたら、その研究者が真顔になって「所長、ここは教育研究所ですが、塾の研究をしていいでしょうか」って、(笑)こう言われた。僕は、これにはびっくりしましたね。(笑)ええっ、と。要するに、教育というと、もう学校教育という意識しかないのです。教育研究所の人たちも、どうもそうらしい。それで真顔になって、「塾へ出掛けていいでしょうか」って言うから、「当たり前だよ。そこへ行ったら、君、喜んでいくらでも材料を出してくれるだろう」って言った。これは忘れられません。大変印象深いやりとりでした。

しかし、一人ひとりがみんな研究テーマを持って、何かやってくださってることは事実だけでも、評議員会や何かで、「所長、ここは教育研究所なんだよ。何を所長は教育研究としてやるか」って言われて、ここでまたこっちが答えるのに困ってしまうのです。一人ひとりの方々は一生涯懸命やってくださってますが、何が教育研究所だって、研究所の研究って何だって言われると、もうこれ、所長はもう手挙げちゃう。で、「いや、いや、それぞれ皆さん熱心にやってお

りますから」って。「それぞれ熱心にやっているとというのはどういうことだ」。評議員会でうんと苛められました。けれども、あらかたの人は「自分はこれが好きなのでこれを研究したい」「自分はこれを研究したい」そうおっしゃるわけです。「あっ、そうですか」って言う以外にはありません。

それから、もう一つは共同研究ということは何人かの方々がやってらして、共同研究で一緒にお金を工面してこられたりなんかしながらやっておられた。その共同研究という意味が、これは最近でもまだよくわかりませんが、何が共同なのかという疑問は常に感じておりました。要するに、一緒にやっているけれども、みんな並行です。各個並行でね、「俺はこれをやった」「俺はこれをやった」「俺はこれをやった」。お金だけが共同の井でね。(笑)別にここで悪口を言うつもりはないです。(笑)私の実感です。「ああ、そういうものですか」って思いました。

それともう一つ、その比較教育です。「比較教育をしております」「はあ」。しかし、比較教育、これは新卒の採用の時に「君、何を大学で勉強してきました」って聞くと、「比較教育をやってきました」って言う。「具体的には何ですか」「アメリカの教員養成の師範教育のところを研究しました。それでマスターを取りました」「はあ、それを比較教育って言うのですか」って。(笑)比較じゃあないですよ。よその国の比較教育の研究者のペーパーの教えてくれる視点・視野と、それから日本の比較教育と言っている方々の視点っていうのは、それはおよそ違うのです。日本のはフランス教育であり、韓国教育であり、中国の教育である。

そういう点から言って、教育研究所が、これは平塚さんも考えられたし、私もそれは大事だと思ってたけれども、所員の中で

朝鮮語、中国語、ロシア語、英・仏・独・スペイン、これだけは使える人がおられました。おそらくこれは、どこの教育学部だってこうは行かないでしょう。だから、どういう国の、どういう人が来ても、専門は違っても、言葉はこなせる。これは、やっぱり、平塚さんはよくお考えになって、そういう人を集めた。ロシア語のできる川野辺敏さんは毎年ソ連へ行きますし、なかなか人のつながりも深い。そういう意味では、比較教育の言葉はともかく、それぞれに専門家がいたってということだけは申し上げられますね。

そうして研究費がないっていうのは冒頭にお話した通りでして、そのために、私はしょうがないから、「おおい、みんな、科学研究費を申請しなさい」と呼びかけました。当時、5000万円ぐらい貰ってましたか。これは大きかったです。当時、科学研究費の分科会長をやった岡本道雄先生が、「君のところは国立教育研究所で、国が研究費を出してるはずだ。にもかかわらず、こんなに科研費をたくさん取って、教育学部のどこよりも大きいというのはどういうわけだ」と言われる。「国立学校の方が特別会計で経費がうんと潤沢ですよ。うちの人文関係というのは本当にかわいそうですから、そう言わないで下さい。大体研究費のもう大半が庁費で消えちゃうから、研究者に配られるのは、『研究者が自分で集めてこい』と言う以外にないので、私は奨励しておりますので、たくさん科研費出してください」と答えました。それで、5000万円ちょっと、その当時貰っていたと思います。

そこで、これは各個研究、共同研究、みんなそれぞれ各人が科研費へ行くわけですから、研究テーマを並べて、それで評議員会で説明しますと、「おい、所長、おまえの教育研究って何だ」ということをまた言われるのです。しかし、そうかといって、何

かひとまとめにして研究って言ったって。幾つかはありました。カリキュラムの研究とか何とかね。大蔵でくれてるのが2,3本です。特別研究、共同研究。それではとっても間に合いません。ですから、若干研究費を研究所として貰ってきてやってるという程度で、あとはそれぞれ好きにやってくださいということを私は奨励しました。しょうがないですから。

もう一つダメージがあったのは、これはあとで挽回するのに、未だにどうも十分にできてないと思うのですが、科技庁が科学技術関係の研究所の、各省所管の研究所の経費はぼんと人当経費を上げておいて、人文関係はほったらかしにした。人文関係は文部省が責任であるにもかかわらず、そこを抜かってたわけです。これはもう大変具合の悪いことでした。ですから、教育研究所は研究費では大変不便をしましたので、大学の研究所みたいになったって、大学と同じようになったって一向に構わないじゃないかというので、それはまあ各研究者がそれぞれに頑張るといった方向をとったわけです。

それから、大学の教育学部がどうなるのか、それは私はわかりませんが、確かに、文部省にいて教育学部の話を聞かないことはないけれども、一番聞かされるのは医学部の問題だったりするものです。(笑) 研究所は教育学部とどんな関係になってるかなあ。例えば、こう見てると、あんまり共同研究も広がってるようにはないし、それからまた、これは国のシステムがやっかいですね。いちいち外へ出て、教育研究所の仕事に協力するには、教授会の議を経てどうかこうかというふうな、出張だとか何とかというふうな議論があつて、それを誰がどういうふうにして了解を取ったか取らないかとか、そんな話が聞こえてくるわけです。そういうことが双方にあると思

います。

各県には、教育研究も行う教員養成の学部があり、同時に教育に対する（クリティック）という意味をこめて東大はじめ旧制帝大にも教育学部をつけた。そして、教育研究をする。国立教育研究所は、東大や京大に教育学部を作ったから要らないじゃないかというのが初期の司令部の姿勢だったわけです。ですから、国立教育研修所はなかなか研究にしてもらえなかったという経緯があります。昭和24年の直前になって、「うん、おまえのところも研究所でよかろう」というふうに言われて、東大や京大の後追いをしたのです。ですから、その時もそうですが、教育の実態に対する研究の噛み方というのは基本が決まっていたわけでもないし、関係者の理解がはっきりしていたわけでもないんだと、私は思っております。

それから、大学院のことと書いてありますが、これは昭和60年に近くなって、各学部でマスターができた、ドクターをどうするかという時に、教育研究所とどこかの大学とでドクターを作るとか、マスターを作るとか、そういうことを少し考えていいのではないのかと思ってたものですから、所長の在任中の一つの課題として、大学院を研究所だけで作っていいのかどうかという問題、東京学芸と一緒にさっさと博士号を作ってしまったらどうかとか、そんなことを手探りで思案しました。

それで、平塚さんが一方では『日本近代教育百年史』というのをお作りになって残されたが、しかし、教育研究所に行けば、各国との比較において日本の教育の基礎データがずっと蓄積されているというふうになってなければいけないというので、私の気持ちとすれば、近代教育史の編纂ということに相当力を入れたいと考えました。

在外研究という制度がありますね。大学

でも、教育研究所でも、毎年1人か2人海外に行くようになっていたのですから、私は佐藤秀夫さんに「とにかくアメリカへ行って、そして戦後の教育資料が向こうに全部行ってるんだから、あれを持ってくことを考えてくれないか」と言って、アメリカへ行ってもらうことを強く懇請したのです。あの人は「いやあ、私は日本の教育をやってますから、英語はうまくありませんし、そんなのいやです」と、大分断られたけどね。しかし、「これは、君、日本の教育史をやる人の責任だ」と言ってね。(笑)それで、ワシントンDCの国会図書館からスタンフォード大学からいろんな所へ「とにかくやってきてくれ。調べてきてくれ」と佐藤さんを送り出しました。

帰ってきた時の第一声が忘れられないですね。佐藤さんがその当時持ち帰ってきた課題の中には教育勅語の改定問題があった。新しい教育勅語を制定するという動きが占領期にあったことを佐藤氏が抑えてきた。どこの誰が書いたかという凶星を抑えたいというのが佐藤さんの帰国第一声でした。アメリカへ行って、事実いろいろその成果はあったのです。帰ってきて、私に言ってくれましたことに、「ワシントンの国会図書館へ行って、占領中の資料集をひっくり返して見て、もう本当に愕然とした。なんて日本人っていうのは嫌な告げ口根性があるって、そしてつまらないことをいちいちGHQに言ってるのか。またそれを向こうは全部取っております」と。(笑)

マッカーサー元帥を神様にしたような投書や陳情書もあって、いろいろの告げ口や陳情が全部収録してあると。その告げ口の悪習は、その後もずっと続くのです。左翼の運動にも続くし、今の教科書問題で中国へ駆け込むのも続いている。(笑)同じメンタリティーですね。だけど、佐藤さんは帰ってきて、「所長、こんな情けない人間の集ま

りかと思うのが一番不愉快だったです」と。

佐藤氏は、同時に、新教育勅語が要るといふ運動があつて、その下書きを書かれた人が立命館の先生であるといふところまで押さえました。(笑) 帰ってきてから、筆跡鑑定をやって研究を進めた。これは、その後まだペーパーにしたのかしないのか知りませんがね。

【梶山】 していますね。

【木田】 しますか。

【梶山】 同志社ですね。

【木田】 あっ、そう、同志社か。「所長、わかったぞ」と。それはうれしそうな顔をして報告にこられましたよ。僕は、これは忘れられませんなあ。

あのスタンフォード大学はその後私の方へ来て、教育研究所が古い証文なんか図書館へ入りきらなくていっぱい抱えてるわけですね。スタンフォード大学の図書館長が来て「おい、所長、うちはもういくらでもスペースがあるから、おまえ困ったら、ちょっとわしに送ってこい。持ってってやる」と、こう言うのですよ。それで、スタンフォードも一生懸命、やっぱり戦後教育史、占領史のあれを集めてるらしいのです。そこで、佐藤さんに「スタンフォードへ行きなさい」と言つて、その所長に会つて貰つた。

佐藤氏はそこで高橋史朗氏とも出会い、向こうにあるデータを全部日本へ持って帰ろうと言つて、聖徳と国研。

【梶山】 明星。

【木田】 あっ、明星だ。明星と国研に、一揃いずつアメリカ側が持ってたものをみんな持ってきたのです。この整理がどこまでついでますかね。

【梶山】 国研と、それから。いや、国立国会図書館と国研と、名古屋大学の鈴木さんのところに行つてます。

【木田】 名古屋に行つてますか。ああ、

鈴木さんがあとから追つ掛けてましたね。

【梶山】 ええ。その3つぐらいになります。

【木田】 ああ。鈴木さんよりは遙かに早く佐藤君が行つてくれたのですが、それは戦後教育はそれでいいですが、やっぱり日本のいろいろ起つてゐる教育の変革、それは佐藤氏が大正時代の文政審議会のデータを、あとでまとめましたとか何とかつていふことを聞いてますと、やっぱり国立教育研究所自体がきちつとした資料を、例えば中央教育審議会、この間の臨教審、ああいう資料なんていふのは押さえてあるはずだと思ふけれども、どこかで責任を持つて系統的に押さえないければ、日本の教育といふのはみんなどこかへ行つてしまいますよ。

ですから、私は、教育研究所は最大の責任がそこにあるなあと思つています。しかしなかなか、そうはいきませんね。日本史だけかわいがるのつていふようなもので、(笑) 実はなかなか、簡単でない。しかし、本当に研究所はそうだと今でも思つてます。

もう一つ、教育研究所で、教育内容方法の改善向上に関することですが、各国の教育研究所と類似のものつて付き合いますと、一番具合の悪いのがここです。カリキュラム研究がうちにはない。サイエンスの関係だけは理科センターで、これはあとでも述べますが、いろいろと大きな国際比較をやつてますから、サイエンスのグループはかなり持っています。本当は肝心の国語から始まつて、どうやつて国語教育をやろう、どうやつていろんな基礎教育を進めていくのかといふカリキュラムの研究といふのがないと言つたら、当時の責任者の悪口を言うような格好になりますけれども。しかし、教科書の決定は別です。学習指導要領を書くのも文部省です。そして、あとは組織的な研究の金はない、こう来ますと、カリキュラムの研究といふのはないです。

これは考えてみると、各教育学部がやってくださってるはずだと。だから、やっぱり研究所が頑張らなくてもいいのかも知れないなあ、と思ったわけです。韓国の教育研究所なんかへ行きますと、ここが一番充実してます。そして、教科書のガイダンスというようなものを一番やっていますね。

ところが、うちはそのカリキュラムについては、学習指導要領があって、教科書の検定があって、出版社が参考書を書いているというだけの話です。だから、各教育学部というのはどういうふうになっているのかと疑問に思いながら、そこは日本のシステムとしてカリキュラムはどうなってるのか。たまたま当大学のように後藤先生がカリキュラム研究センターってものを作っておられる。ははあ、そういうところはカリキュラムということを考えておられるんだなあというふうに、こう何か遠いところの存在で、(笑) 漠然と考えて、これが仕事にどう噛み合うのかというような関係は、もう問題じゃないのかなあというふうに思ったまま終わっています。私は、臨教審に行った時に、政府として「いやあ、カリキュラム研究っていうのはどうしてもやらなきゃいかんと思いますよ」と。折角臨教審で何か議論するのだったら、そのくらいのことはなんとか固めてくれませんかと言ったけれども、これもどうも中途半端です。

ですから、どこでどうしたらいいのかという問題は残るでしょうが、検定と絡んで、そして教育課程審議会と何かリンクできるようにならない限り、教育課程の改定というのはみんな集まった人の思いつきですよ。ここをこう変えたらいいとか何とかってというのはデータなしだ。だから、これは、やっぱり教育全体として見たら、かなり基本的な問題だと思いました。

それで、お金がないから、いろいろ国際的な協力事業をするのは、全部、金を集め

てこないといけませんね。

【梶山】 歴史のところで、佐藤秀夫先生がおられる時の大原則で、あれだけの資料を集めたら、そこから、例えばその時点で全国の研究者に開放する。普通の先生は全部抱え込むんですよ。自分の研究論文してからでしか見せないという。この根性がいけない。本当にそういう意味で、それを打破する責任が国研にはある。

ですから、全国から内地留学の時に、東大とかいろいろ東京に大学があって、内地留学させてという人もあるけれども、佐藤先生のところへ内地留学で行きたい。

【木田】 ああ、なるほど。

【梶山】 そういう若い研究者が多いです。

【木田】 ああ、そうですか。それはよかったですね。

【梶山】 だから、臨時教育会議の、ああいうような資料集を文部省からお金出して、必ず、これまでの審議会のは、全記録を、鑑定文書も含めて、国研で集めたのです。これ、文政審議会のも来てるんですね。

【木田】 ええ、そうです。

【梶山】 それで、そのあとの金は続かなくて、今は岩波の記念事業で、その教育刷新審議会、あれはもう逆に岩波が今進行中ですね。そういう意味では、かなり佐藤さんに、木田先生のおっしゃったことが実っておられますね。

【木田】 ええ。本当は、佐藤さんのところを強化したいですよ。ところが、それは誰も応援しない。それで、また、そういう問題が、その内発的な問題で本当に必要なのに、文部省は、仕事するのにそんなこと関係ないですから、なかなか考えてくれません。

【梶山】 それと、もう一つ、その佐藤さんがやりたかった東京は、もう関東大震災と戦災でほとんど資料がなくなっている。文部省のやった政策の基本データが、東京

ではなかなか見れないのです。地方のいろんな県庁文書だとか、どこかにあるものを全て集めて、そしてそれを整理して、日本の制度の根底にしよう。過去の基本蓄積した資料を全部見れる、そういう体制を作りたいとおっしゃってたのですね。

【木田】 ああ、そうですか。

【梶山】 ところが、あの国研の再編で、そういう歴史、もう切っちゃったでしょう。

【木田】 それは、地方の教育学部とのシステムか、何か教育史なりが、こういう協力できるような体制でそれを作っていくということが必要なあとだと思いますけれども。

【梶山】 そうですね。

【木田】 私どもも、研究所の中でやっと教育史に少し水向けて、(笑)「ちょっとやってよ」って言うのが関の山だったからね。

【神田】 21, 2年ぐらいに各研究所が先行しますよね。ところが、教育委員会制度ができて、26, 7年ぐらいから、教育委員会の中に調査研究の部課を必ずしも置かなくてもいいように変わって行って、各県の研究所が性格が変わってきます。

【木田】 ええ、変わります。

【神田】 実はその辺が、国研との動きだと、(笑) ちょうど逆になってきます。

【木田】 ええ、そうですね。それはあとでまたお話をしようと思っています。

臨教審に出た時に、私は強くカリキュラムは関係者に言って、「国研を考えてよ」って言ったけどね。もう、何と言うのか、あと細かい動きをトレースしてませんのでね。

【有菌】 あの4・6答申のあとですけれども、その時に、教育課程研究開発学校、そこで例外のカリキュラム開発ができる機関というのを文部省にお置きになったものですから、あれは先生の時では。

【木田】 ああ、そうだったかも知れませんね。

【有菌】 結局、あれが、今唯一の公的な

機関で、カリキュラム研究ができる状態にはなってますけれどもね。

【木田】 ちょっと雑談みたいに合いを入れますと、お手元の「教育研究所 30年史から」っていうふう引張って、国立教育研究所の研究が30年史をまとめる時に、教育研究所は何をやってきたかをまとめた資料ですが、それから項目だけ引張りました。

近代日本教育に関する研究では、日本近代教育百年史、近代教育史に関する基本的資料の体系的な調査研究で、皆さんに「いろんな資料を持ってきてください」って言って、今の渡辺氏が一人でふうふう言ってることだと思います。まだ続いているはずですね。それから、近代日本教育史に関する諸研究で、旧制高校の研究をやってますね。それから、日本における教育の近代化の研究。外国教育・比較教育に関する研究で、欧米諸国の教育の研究。これは、かなり活発ですね。研究成果もたくさん出てると思います。それから、アジア教育の研究。これも韓国、中国等、かなり担当者からいいものが出てると、私は思っております。それから、昭和40年代大学紛争の頃から絡んで、高等教育に関する総合的な比較研究。よその国との研究。それから、主要国の中等教育改革動向に関する比較研究。これは、平塚さんが一生懸命になって教育改革で講演をして回ってらっしゃる時のテーマがこういうことだったなあと思い出します。

それから、研究体制に関する比較研究というペーパーも、出てきております。それから、教育政策と制度に関しては、教育計画に関するもの、中央教育行政機構の研究、それから、学校の組織運営の研究。しかし、こういうのは、文部省にいてもひとつも目につかないですね。(笑) 私は関係した仕事をやってる方だったから、こんな研究があるよっていうのがもう少しわかっていい

はずだったのに、どうも研究所で研究してどこかにお蔵になってたのじゃないのかなあという感じがする。(笑)

それから、私学の性格と機能、大学院の研究。これは、51年、53年にやっている。研究はしましたが、という格好じゃないのかなあ。それから教育経済の研究。これもちょっと動きは鈍かったですね。もう少し教育とその発展、経済というのは30年代から問題になってたことですが、50年になってやっと動き始めた。教育内容・方法については、ここに書いてあるような学習過程の研究、学力調査、創造性研究。学力調査は、戦後まもなくからですから、昭和23年、27年、30年、一応お手伝いをしているわけです。

それから、道德教育の研究。これは、平塚所長が大変力をお入れになって、ユネスコにも言って、世界の教育のためには道德教育というのを、それぞれの国の宗教を超えてというか、宗教とは別に考える必要があるというお話でした。

入学試験の研究。これはいろいろなことを背負った研究だったわけですね。幼児教育というのは、白金幼稚園というものが姉妹校みたいな関係でありまして、発足当初の頃にちょっと研究所としての動きがあったのです。

それから、科学教育・数学教育の研究では、国際共同調査、IEAの国際数学共同調査、それから科学教育センターでカリキュラム学習の開発とか教材・教具の開発とか、ここは、私はわからないけれども、その動きを見てると、かなりそれなりに動いたなあというふうに思っています。数学教育も、これ、最近もまたやっておりますが、いい数字が出ております。

それから、産業技術教育、社会教育というのは、こうタイトルが挙がってるだけで、あんまり中身はないんじゃないかなあと思

ったけれども、担当者が聞いたら怒るでしょう。(笑)

そして、国際共同研究でございますが、数学と理科の学力の国際比較。IEA。これは、私も相当嘔みました。力を入れました。平塚さんの時に、第1回の数学教育、第1回の理科の教育をおやりになりました。私が担当の、昭和56年、58年、第2回の数学と理科は、私の在任中にやりました。ですから、仕事として、私自身が、「ああ、教育研究所の仕事としてやったかなあ」というのは、この二つですね。あともう一つ申し上げることもありますけれども、一応私が就任するまでの間研究所が30年史の中にこういう研究をやってきましたということを書いた流れはこういうことでございます。

そこで、私は、国際関係ということで、かなりいろんな仕事をさせられたと思うので、そのことをお話しておきたいと思いません。

まず最初に、ICET、International Council for Educators' Training との出会いと書いてあります。これは、私が53年の7月か8月に研究所の所長になりまして、10月頃だったかと思いますが、韓国から、金某という私立大学の学長がやって来られまして、International Council for Educators' Training、要するに教師教育の世界的な組織があり、それが、昭和54年の夏にソウルで年次大会をやる。ソウルでやることだから、日本の教育については是非基調講演に来てくれという話が、いきなりあったんですね。なるほどお隣のソウルで、そういう教師教育の会議があつて、日本の教育の現状について基調講演をするというのはありがたい話なので、それで「わかりました」と、こう言ったのですが、その時にその金学長が言ってきた言葉で、まだ今でも覚えておりますけれども、「今度

はソウルでやることだから、多分日本からも相当数の、100名やそこらの出席者はあるだろう。だから、君は日本語でしゃべってくれて結構だ。そうすれば、私の方で英語に訳すから。そう言葉を気にしないで来てくれ」と、こういう話だったんですね。(笑)

僕は何も知らないので「そうか。それなら、また、余計気が楽だなあ。それじゃあ、一応予定しますよ」と言って返事をしました。ところが、だんだんあとから話が出てきて、「いやあ、この教師教育の会合というのに、日本からは小林哲也さんが前に出席したんだが」。(笑)それは彼がハンブルグにいる時の話ですよ。それで「あんまり出てきてくれないのだ」と。「どこへ頼みに行ったらいいか」って言うから、これまた困ったことになったと思って、それで「いや、文部省の教員養成課というところがあるから、そこへ行って」、そうした教育学部の連合組織ですか。あれ何て言いましたか、後藤先生。

【後藤】 教大協ですね。

【木田】 ああ、教大協。「教大協との連絡がつくはずだ」と。会長は、東京学芸の学長さん。「まず文部省へ行って、その後、教育大学協会に行って、韓国でこういうことがあるから、案内をしてご覧なさい」と。「よし。近いから来てくれるだろう」というので、そして1年経って京城へ行きましたよ。そしたら、(笑)日本からの出席者が2,3人だったかな。それはアジアから300人ぐらい集まってるんですよ。ユネスコのバンコクの所長もやってくるし、各国、フィリピンにしろ、タイにしろ、みんな錚々たる教育学の学長さんらが来てるわけです。ところが、日本では、各種学校でこういうところへ出るような感じの人が1人、2人ただけで、(笑)全然顔を出していない。

それで、日本語で話して良いと言ったけ

れども、こんなに、(笑)日本人のいないところで日本語を使っても具合が悪いと、用意した英文を読みました。1週間の会議ですが、私はその基調講演だけ頼まれたものですから、3日間で帰国しました。ちょうど須之部さんというのが韓国駐在の大使に行っていました。大使は、私がそういう会議でソウルへ来るということを知ってましてね。「韓国の学長と一緒に呼んでるから、是非顔を合わせて、学長との顔をつないでくれ」と言う。大使も私を材料にして、大学の学長を呼ぶちょうどいい機会に利用しておられた。そういうふうにご利用くださる大使というのは極めて少ないのです。

私も向こうの学長との付き合いができてよかったなあと思って帰りましたら、私を呼びに来た金学長から、「結局、残念ながら、いろいろと努力したけれども、日本の教員養成学校からは出席が少なかった。この世界の教師教育の中で、日本がいないということは困るから、おまえさんを理事にした」と、こう言うんですよ。(笑)

それで、これもまた困ってしまった。僕は研究所で、その教員養成のことを知ってるわけじゃない。けれども、お隣の韓国で年次大会をやって、日本の教育を各国が目しているのに、誰も日本から参加してくれないというのでは困るから、おまえ、とにかく理事にしたから、ここへ入って、次出てこいと。そう言われますと、やっぱり「嫌ですよ」と言うわけにもいきませんね。

(笑)それで、一期の間に、私は次誰かに譲らないとならない。少なくとも、教員養成の組織の然るべき人に譲らないといけない。私は、それで、一期の間にマルデルプラタって、アルゼンチンなんです。それから、カイロとローマと3箇所へ行きました。行くのに、こういう予算があるわけじゃないですよ。みんな自分で金工面してね。そして、すつとんで行くわけですけど。

それぞれにいろいろな思い出はありますが、いや、困ったことに小委員会の座長なんかにはさせられましてね。それで、早く渡さないといけないと思ったものですから、この教大協に相談して、英語ができなきゃ具合が悪いということでね、岡山の教育学部長をやってらした英語の先生。

【後藤】 片山さん。

【木田】 片山さんの名前を、とにかく次はこの人がやるって言って、出しといて、片山さんに有無を言わずバトンを渡したのです。そしたら、片山さん、あつと言う間に高専に変わっちゃって、「木田さん、高専じゃあ、ちょっと具合悪い」と言って。(笑)それで、おそらく、あと出ていないと思います。

とにかく、私はそのお蔭でね。マルデルプラタっていうのはアルゼンチンの有名な世界の避暑地です。ブエノスアイレスからずっと南へ 200 マイルほど飛んで行った所です。当時はアルゼンチンは、軍政でね。軍用機でもって、そこまでばつと連れていってもらったり。向こうは軍政の国だから、国際会議やる時に軍人さんが手伝って、世界の人を集めるわけですね。いやあ、これもすごいなあと思いつつながら、そういう経験をしましたけど。いや、とにかく日本でもうちょっと何かこういうところへパーティシペートしてくれないのかと思った。

その次に、今度はフンボルト財団のことです。ファイファー氏の名前が出てますが、私は文部省在任中にフンボルト財団で予算の面倒その他、ちょっとお手伝いしました。このファイファーっていう人は、この間も日本に来ておりましたが、ドイツのフンボルト財団で、若い時から理事長というのをほぼ 40 年おやりになったのです。

私が文部省におります時に、ドイツはフンボルト奨学生っていうのを、日本から毎年一番たくさん呼んでいる。それで、一番

遠くからだけれど、一番たくさんドイツへ呼んでる。確かに、それはもう有名な方々が、かなりフンボルトでドイツへ行って 1 年間勉強されていますね。教育学では天野正治君がそうです。それから京大の岡本道雄さん、東大の三ヶ月章さんのような方も、みんなフンボルトで行ってらっしゃる。だんだん、日本から大勢招きたいんだが、なにしろ日本は遠くて旅費がかかるから、ヨーロッパの国から呼ぶようなわけにいけないので、せめて旅費ぐらい持ってくれないかという話が来ました。それは全くもったもな話で、日独仲良くする必要はあるなあと思ひ、僕は一言のもとに「OK」って言って、予算化して、学術振興会を使ったと思いますけど、その金で翌年から 40 人分ぼんと日本から送ったんですよ。ファイファー氏は、それを多としてくれまして、私が役所を辞めたと言ったら、ドイツへ来いって。一度旅行に来いって招待状をくれたわけです。それで、ラウンドトリップの切符をくれました。

教育研究所に就任してその年だったか翌年だったか、それも比較的早い話ですが、文部省を辞めてすぐドイツへ行く機会が、フンボルト財団のお蔭でありました。そして、向こうの切符で回ったものですから、飛行機でハンブルグへ着いたわけです。そしたら、ハンブルグのホテルにポスルスウエイトっていうハンブルグ大学の教授がやって来ました。これは文字通り比較教育の教授ですが、私はどういう名前でどういう人物であるかさっぱり知らなかったけれど、ホテルにいるということで、ミスター木田って言ってやってきましてね。そして、実はかくかくしかじかって話をしてくれたのが、教育到達度評価学会（IEA）という学会のことです。

平塚さんが、数学の国際比較では日本は一番だとか何とかって、それは威勢のいい

ことをおやりになって、その話は聞いてたのですが、それがどういうメカニズムでどうなってるかというのは何もまだ聞いていないうちに、そのハンブルグでつかまっちゃった。(笑) ポスルスウエイトから、I E Aという組織があって、各国の教育到達度というものを比較研究している。日本は前回、算数・理科をやってくれて、日本の成績は非常にいい。それが、やっぱり各国のその共同研究の刺激にもなるし、是非第2回をやりたいたんと言う。

あとになって聞いてみると、その第1回は全部向こうの経費でやったわけです。そして、研究所から小島さんが1年間ストックホルム大学へ行って、この勉強をしてこられたわけです。そういう金も、みんな向こうの金でやってもらったんですね。試験問題を作るとかいろんなことを分析するのも、容易じゃないですが、そのI E Aという組織で持ってるお金で代表を集めて、試験問題を作って、共通問題にして、各国へ持ち帰って、予備テストなどをそれぞれやってみて、それをまた持ち寄って、「いや、翻訳した時に、これはここが具合が悪い」とかっていう調整をして、そして本番を迎えるわけです。本番は、各国とも大体それぞれの国の予算でやってる。しかし、そこへ行くまでの準備は、これはみんなその学会ですよ、国際学会の金でやるということです。

そこで、私が行ったのは54年ですか、53年の暮れだったかな。寒い頃だったから、53年の暮れだったかも知れませんね。「ところで、木田さん、日本というのは金持ちの国になったから、今度はこの国際的な比較調査をやる時に、日本の金で手伝ってくれ」。かくかくの金がほしいと、こう言われたんですね。何も知らないのを、いきなり、(笑)ハンブルグのホテルで膝詰めで、「どうだ」と、こう言うわけでしょ。私は困っ

てね。しかし、何もわからないけれども、今まで国際的にやって、日本は全部自国の調査以外は一文も金出さないで、所員が研究にするのも、ストックホルムの大学だとか、外国の大学の経費でそういうトレーニングをしてもらって、これではちょっと具合悪いと思った。日本は相当のところまで来たわけですからね。今度は日本でその金を持ってくれないかという話になった。

しょうがないから、私、何かわからないけどそこで引き受けましたよ。それじゃあ、わかったと。威勢のいい日本になったわけですから、こっちもあんまり、いやいやって言ったんじゃあ具合悪いと思って、わかったと。なんとか、努力してみようというので、帰っていろんな話を聞きまして、そして、この金を集めるのに相当苦労しました。

というのは、日本のあっちこっちにある財団は、今年何やるかっていう申請を受け付けるのです。しかし、あと5,6年かかって、少なくともこれだけの準備をしてね。5,6年先には各国こういうことをやって、それを集めたら、また2,3年かかって報告書をまとめるというその金を出すというところはどこへ行ってもないですよ。しょうがないから、経団連へ行きました、この間亡くなられた花村仁八郎さんに助けられました。そして、こういうことで、平塚さんの時には向こうの金でやったんだから、日本の国内は日本の予算で調査をするにしても、日本は世界一だったって言って、平塚先生はわあっとこう喜んだんだけど、今度はそうはいかないから、何とかして金集めるっていう努力をせんならんので頼みます、って言ってね。

いろいろ考えて、花村さんが、「そうだな。数学と理科か。やっぱり数学と理科に関係のある会社を回る他ない」というので、自動車と電機の会社を紹介され、約12,3社。

その他若干ありましたけどね。「それ以外の所へ行っても、数学教育は関係ないと言われるから、君、それは自動車と電機ぐらいでどの程度集まるかやってみろ」って、こう言われた。で、2カ年かかって、大体、電機と自動車で5500万円ほど集めたのです。この金集めについては、総括企画調整官の笹岡太一さんに大変な苦勞をかけた。

日本の自動車も強いですしね。電機もやりました。そのお金があったから、また、ある意味で、私はかなり外へ付き合いに出るということもできましたけれども、この国際IEAの金で問題を共同で作るためには、何人か専門家が行かないといけないのです。そして、ディスカッションをして作って持ち帰って、日本でテストをしてみても、また持ち寄る。そういう金は文部省から出ないです。しょうがない。集めた金で研究者が行くようになった。

今度は私の方からかなり金が出るものから、私は向こうが大事にして呼んでくれるわけですよ。これまた、言葉が十分でないので辛いけれども。お蔭で、私もいろんな所へ行かせてもらいました。カナダのモントリオール、それからオーストラリアのキャンベラ、それからエンスケデって書いてあるのはオランダですが、こういう所へ、その役員会があるたびに行って、そして議論をして、そして総会をするわけですね。こっち側がある程度かなり基本的な金を出すから、学会の全体の本部はその頃、スウェーデンにあったでしょうか。トールステン・フセンという人や、ポスルスウェイトという人が旗を振って、各国の研究者がかなり協力しているのですが、そういう人たちと、お蔭で個人的には大変知遇を得ることになりました。最近でも、トールステン・フセンから、大学評価っていうペーパーが送られてきました。

トールステン・フセンなんていう人は、スウェーデンだけで大事にされてるのではなくて、国際的に大事にされてますね。相当な出来物だなあというふうに、私などもお会いして思ってます。そうした資金の金主と頼られただけに、若干いろんなことを経験しました。

私が一番、その中で経験したのは、お手元に「教育改善における教育研究の役割」というコピーがありますね。その105ページのところです。これは、非常に印象が深かったものです。第2回の数学の比較調査の最終報告ができる前に、オランダのエンスケデという所で役員会の会合がありまして、調査の結果を持ち寄って、日本とオランダでどういうふうに、オランダだけじゃないけれども、役員会の国々との間でどういうふうにまとめていかどうかという議論をした時に出てきたペーパーです。

これは、大体サンプルが220クラス前後取ってると書いてありますね。それで、日本の平均は30点満点の18点というところにありますが、いちいち書いてあるのは、そのクラスの平均が26点の学校が3つあるという意味です。30点満点の26点のクラスが3つある。21点のクラスが12ある。しかし、その21点の0、21点の1、1、1、1と、こういうふうなことで数えて、こうクラスの数をやってるんですね。この表をオランダの視学官のような人と隣に座ってね。「ミスター木田」って言うのです。「どうして日本は下のクラスがないか」って、こう言うわけですね。要するに、オランダは、成績が上の方は日本よりも多いのです。大体200取ると。そして、平均は日本が高い、世界一だとかって言ってますけど、日本の世界一っていうのは、要するに点数の低い下のクラスがないということなんです。それで、向こうは、すぐ、専門家だから、こういうのを見て気が付きますね。

そこで、「ミスター木田。日本ではどういう教育をしてるのか」と、こう言うわけです。それで、僕も「あっ」と思ったけれども、確かにこの数字見たら、そういうことがすぐ出てくる。それで、僕は「あっ」と思い返したのは、筑波の木村さんを訪ねて、筑波になんとか学校っていう公立の学校ですけど、小学校で、コンピュータ教育を早くやってるところがあって、そこへ訪ねていった時に、子供たちが一生懸命教室で1人に1台だったか、2人に1台ぐらいあるコンピュータで、いろいろと勉強をしている。担当の案内してくださった先生に、「大体どの子供もこうやってコンピュータに触るのが好きですか」って聞いたんですよ。そしたら、「いや、そんなことはありません」「じゃあ、どういう人がコンピュータに取り組んで一生懸命やってくれますか」って、小学校5年か6年の先生に聞きましたら、「それは成績のいい子供と成績の悪い子供です。そして、ちょうど平均ぐらいの子供は、コンピュータのこの学習よりは、直接私の声の方を好む」ってということがはっきりした。「それはどうしてかと自分も考えたことがあるのですが、自分は子供たちにいろいろと指導をする時に、平均のちょっと下を狙ってものを言ってます。そうすると、平均のクラスの人は、コンピュータでいちいち機械的な答えとか指導とかをもらうよりは、先生の生の声の方がいいに決まってる。ところが、それでやると、できる子供とできない子供はみんな除け者になっちゃう。できる子供は、私のそういう生の説明なんかまどろっこしくて、コンピュータでさっささと走っていきますね。それから、できない子供は追いつくのに一生懸命になって、自分でコンピュータをやっていますよ」と、こういう話でした。私は、それが非常に印象深い話でしてね、頭に残っていたものだから、そうだ、そうかもし

れないと思って、「いや、日本の先生は、学級の中で、子供のこの平均点のちょっと下を狙ってものを言ってる」と、こう言ったのです。そしたら、向こうの指導主事が喜んで、「あっ、そうか。やっぱりそうか。オランダはどの先生も上ばかり向いてるのだ」って。(笑)「だから、こういう数値になる」って、こう言われる。(笑)これは僕は忘れられないですよ。とにかく、日本の、数学の集計が世界一だとか何とかって言ったって駄目ですよ。それは、上がないんだから。下がないんだ。(笑)それで、平均のところへばっとなってるって。これはもう大変シンボリックな日本の教育ですね。

そういう思いがけない体験もしましたけれども、本当は日本で少しそういう言葉の回る人が出てきて、そういうお付き合いをしてくださるといい。IEAには、日本では国研以外に入っていないからしょうがないです。国研の担当者がいつも行ってこうやるし、たまたま私は金を集めた経緯があって、「ミスター木田、出てこい」って役員になるから。理事を仰せつかったら出ないわけにいかないんで、出掛けて行って、そういう体験をしましたが、このこと自体の分析とかいろいろなことについて、もっといろいろと中でやるかあると思います。

しかし、この数学と理科の共同調査は、つい最近では、先ほど申し上げましたように、第3回を理科と数学と一緒にやったようですけれども、比較的研究所が研究所として一緒になって対応している。というのは、それは、主として科学教育センターだからっていうことがあるわけですが、こう対応してくれた研究所としての仕事だなというふうに、私は思っております。

なお、先ほどのこの資料の中で、皆さんにも皮肉に聞こえるかもしれませんが、102ページの資料をご覧ください。教

育研究の役割というので、これは教育研究所でいろんなサーベイをした、研究所のサーベイだったと思いますが、研究者のサーベイから引っ張ったものですね。学校の先生がどういふのを参考として役に立つと考へてるかという表が、102ページの上の四角い図です。そうすると、要するに教科書会社の指導書・参考書が一番役に立つと言っているわけですよ。大学の先生の研究紀要というのに関心が低いと、役に立たんと、極めて歴然としています。

私は、これは、そのIEAの総会で、ペーパーをあとで読んでくださればおわかりですが、何を言ったかっていうと、よその国と比べて、日本の学校はそれぞれの地域で、それぞれの教科、それぞれの先生の研究活動というのが極めて熱心、活発なんだという話をしたのです。だから、日本にはデューイだとか何だとかってというような教育学の大先生は出てこないけれども、そうじゃないんだと。みんなそれぞれが自分のところでやっていると。でも、その結果がこういうことになってるという話をした材料です。あとご覧いただいて、いろいろとご指摘をいただければありがたいです。

それから、もう一つ、この第3番目が、IEAでなくてユネスコ事業への協力事業ですね。(アーペード)の諸事業。アジア各国の教育関係機関、教育関係者との協力。これは、私の前任者の平塚さんがユネスコ本部の課長をやっておられて、そして帰ってこられた経緯もあるものですから、ユネスコの活動というものをアジアのリーダーとしてやっていきたいと思いますということは非常に積極的におやりになりました。それで、ユネスコから見たら、日本の教育研究所、NICERというのは、ユネスコの肩代わりの仕事をしてくれてる大変ありがたい所だという見方に今でもなってるはずですが、当時から既に平塚さんはそういう意気込み

で教育研究所の旗振りをしておられました。それで、カリキュラムの問題だとか、道徳教育だとか、理科教育だとか、いろんなことでそのアジアの研究者、政府のお役人であることもあるし、研究所の所員でもあるし、大学の先生であるとか、それは相手はいろいろ、相手の都合でご勝手ですけども、年に3回か4回は教育研究所に人を集めて、そのための政府予算が、これは付いておりました。政府予算で、一生懸命仕事をされました。

私がそこでやりましたことは、当初平塚さんがおやりになった時は、東南アジアを中心のアジアの諸国でしたが、それでやりますと、英語のしゃべれる国がフィリピンとインドになっちゃうんですね。あと、それはタイの人だってみんな英語のできる人は集まってくるけれども、こう見て一番リーダー格になるのがインドに行きますよ。本来ならば日本で招致をして、教育研究所でやるんだから、教育研究所の然るべき人間が座長になっていろいろな差配をして、議長役も務めて、ああだこうだと議論の整理をすべきなだけけれども、そこになると平塚先生といえどもそう自由じゃないから、先ほど話したように、アシスタントを常に置いてらしたわけですね。

僕は、いよいよどうにもなりません、ハウ・ドゥー・ユー・ドゥーぐらいは、(笑)だって、聞くのはかろうじてこうやってるけれども、しゃべって、そのプリサイドするなんていうことはとんでもない話になってしまいます。こっちもしんどいし、専門家でもないという弱みもありますから。だから、そうすると、誰かをチェアマンにして1週間なら1週間の会議をうまくこなさないといけない。

そこで、毎回インドじゃあ困るなあと。いくらしゃべるのは上手であっても、(笑)東南アジアの人たちは、英語が流暢であれ

ば喜ぶわけじゃないから。そこで、これはちょっと変えないといけないと思って、豪州とニュージーランドを呼び込むことにして、そして太平洋の島々も入ってこいって、こういうふう呼びかけました。これは、日本の外交の領域からいきますと、豪州・ニュージーランドはヨーロッパですよ。あれは欧亜局に入ってます、アジア局に入っていない。これはまあ日本の外交のおかしいところですよ。 (笑)ところが、ユネスコも若干そういうところがあります。豪州とニュージーランドというのは、ユネスコの中での自分の立場も困るんですよ。時々アジアだって言われ、時々ヨーロッパだって言われて、 (笑)それでいろんな役員の投票なんかの時にどっちでどうなるかっていうことで揺れます。僕は、これはニュージーも豪州もアジアの中に入れて呼び込まないといけないと言って、積極的に I E A や何かで豪州・ニュージーと付き合ってたから、「積極的にこっちへ入ってきてください」と言って、ユネスコの事業にも入ってきてもらう。(アーペード)の事業を、そういう意味では広げることになりました。これが私の在任中にやったことでしたね。

ですが、これをやりながら、本当に痛感したのは、平塚さんのようにユネスコに関係があって、できる人が教育研究所におられて、教育研究所で本当に片腕にして言葉の不自由のない人がいて、一緒に動いてくれるからできるけれど。ところが、一番これは困ったなあと思うのは、研究者が横を向いてるわけです。だから、カリキュラムをやると言ったって、カリキュラムの研究者が出てこない。理科教育をやると言ったって、理科教育はそっちで、I E A の数学で忙しいとか、理科で忙しいとかって言ってね。だから、各国が集まってきたても、日本の人間が集まらない。そして、それもまた困ったことに、どこかの大学の先生で、

こういうところへ入ってくださる人はいるだろうかと言ったら、「予算がありません」と。外国旅費はあるけれども、国内旅費がないから、 (笑)日本の大学の先生を呼べないっていうのですね。

しょうがないから、県のセンターの人もおられるようですけども、県のセンターで少し言葉のできる人をちょっとすまんが来てくれて。よその国から集まってきたも、日本の専門家が対応しないっていう状況が、私の一番不愉快で困った現象だったわけです。ですから、そういう人が中におれば、僕は下手な議長だって務まるわけですけども、肝心の対応の人間が教育研究所の中でも出てこない。まして、それ、どこからも出てこないで、場所を教育研究所で、アジアの関係者が集まっているという状態ですね。

これが日本の国際交流って、どうも具合の悪い話だなあと、平塚先生は馬力があつたからよかったけれども、その後を継いだ私は、もうこれは本当に具合が悪いという思いをしました。だから、終いに、「おい、こんなことだったら、金のかからないシンガポールへみんな集めて、おまえ出掛けて行け」と。世話役だけで (笑) その方がまだいいじゃないかと。わざわざ、日本というのはアジアの中で一番外れてるわけですよ、遠い所へ、高い旅費出して集めてきて、そして日本はどこへ行ったんだって言ったら、小学校へ連れて回って案内するぐらいで会議にならない。これも日本の現実だといえそうですけれども、ここはなんとか付き合いを広げていかないと。

そこで、私は、こういう経験を通じながら、もっと日本は付き合う時に通訳というのを使わないといけない。ところが、これが、政府全体としては外務省が嫌がる。僕はもう少し通訳を通じて、自分の言葉で、通訳に訳してもらって、相手側に伝えるよ

うにしないと、生半可な英語でしゃべってというのは独り合点もいいとこじゃないかと私自身は思うのです。こういう国際会議には必ず立派な通訳があって、日本語であれ何語であれ、ちゃんと日本語で発言したらスペイン語にもなり、英語にもなり、ロシア語にもなる、中国語にももちろんなるようにしないと、英語だけしゃべったらいいなんていうのは国際化じゃない。そういう問題をいやというほど感じました。

ユネスコ事業への協力ということで教えられたことはそういうことです。ユネスコ国内委員会の委員をやっていたから、ユネスコの総会に出席したり、ジュネーブにある International Bureau of Education という国際機関によく出席しました。私は教育研究所に在任中、同じ会議で 11 回ジュネーブへ行きました。そのくらいになりますと、多少言葉はしゃべれなくても顔はなんとかあります。ああ、日本から来てるなあというぐらいのことは理解してもらえますのですが。やっぱり続けて顔を出すということと、それから日本語でもちゃんと通訳が付いてしゃべれる体制というものを作らなければ、日本の国際化っていうのはとってもじゃないがうまくいかないなあという体験をしました。それが、研究所にいる間の主な国際関係の仕事でございます。

その次に、南フロリダ大学への出向と、こう書いてありますが、これも、人間の出会いというのは不思議なもので、そこにマーク・T・オアという教授、この人は今でも現職の教授です。82,3 才かな。もうちょっとなるのか、この人は、占領中、Office of Education の次席だった人です。ですから、実質的には大将みたいなことで、占領当局のいろんなことを、3 年間日本におりましたから、大抵その占領中の教育改革のいろんなことを知っておられる人ですね。たまたまこの人が、私が次官をやっておる時に

訪ねて来られましてね。戦後初めて訪ねてきた。占領政策の時に来て、帰ってから、初めての来日だった。とにかく戦後 30 年経ってやってきたら、まあ浦島が帰ってきたみたいに違ってる。そして、占領中われわれが予想したこととはまるっきり様変わりのした素晴らしい教育活動をやっているというので、それは自分たちのやった仕事があんなに日本で発展したかって言って喜んで帰られたわけです。帰ってから、私が今度は教育研究所に変わったっていうのを聞かれて、ひとつ是非俺のところの大学へ来て、戦後日本の教育はかく発展したということを講演しろ。フルブライトで呼ぶからと、こういう話になりました。

これまた、もう大騒動ですよ。断るのもちょっとおかしいし、他の誰かに行けって言うわけにもいかんし、それならまあ、折角フルブライトの金付けて来いって言うんだったら行かざるを得ない。しかし困ったなあと思って、日本の教育史を佐藤氏と一緒にやってた内田さんという人がいたのですが、金沢の人ですけどね。内田さんに「おい、すまんが、ちょっと先に行って、1 年間向こうへ行っててくれ」と、(笑)これがひと言もしゃべれない男なんです。(笑)だけど、日本史やってるんだから。「戦後の日本の教育はこうなったっていうことを、君、国研を代表して行ってこい」って。(笑)その次に佐藤氏をワシントンへ送り出したんですよ。内田さんが先に行ってて、そうはいってもあの人にはしゃべれない、日本史でこつこつやってた人だなあと思いながら、僕もまあ、それは行きますが、とてもじゃないが半年や 1 年も行くわけにいかない。所長になったばかりだから、1 カ月ちょっとで勘弁してくれって 5 週間でしたか、4 週間でしたね。その代わりミスター内田を行かせるから。(笑)内田君も目ばちくりしたと思うけど、南フロリダ大学へ行ったん

ですよ。

私は、翌年の3月だったかな。今度の資料集に英文の資料が出てくるのはそれですけどね。それを一生懸命になって日本語で書いて、それをハリー・レイっていう南山大学の先生（当時国立教育研究所の客員）に、「こんなことになったから、この英語を手伝ってくれ」と言って、所内の英語のできる人とハリー・レイにこう書いてもらって、それを持って、読む以外の講義はできないわけですが、（笑）けれども、その南フロリダ大学は、タンパにあります、そこへ行きました。

これは個人的な、どうにも逃げられない体験だったけれども、やっぱり国際的な体験としては忘れられませんか。そして、その大学へ行きますと、よく来てくれたと。学長が最初にやってくれるセレモニーが、自動車のキーを渡してくれた。自動車を貸してくれるんです。幸いに私は、役所を辞めて、運転免許を取っていましたから。（笑）それで、外国の免許を持ってね、なにしろ車がないと動きがつかないという所でしょう。それで、ホテルへ泊まって、ホテルから大学の貸してくれたトヨタの車でした。トヨタの新ピカの車を貸してくれて、大学へ通いました。始めに学長室で、「ああ、ご苦労さん」って、最初の仕事がキーを渡してもらうこと。その次の仕事は何をやるかっていったら、学内のポリスへ行くのです。そうして、学内のポリスで、駐車オーライという、どこへ駐車してもこの車は構いませんというポスターを貰った。それでやっと動けるわけです。ははあ、なるほど、そういうことか。トヨタの車は当時の新車でしてね。学内に置いてくと、みんな、学生から教職員が、「これはすごい車が来てる」って、（笑）評判にしてくれました。その車で、呼んでくれたオアさん夫妻を連れてディズニーへ遊びに行ったりしました。

そういう意味で、南フロリダ大学へ行ったってというのは、大変いい経験でした。

それで、呼んでくれたオアさんというのは、社会科学っていいですか、政治学の方が色彩が強いのかも知れないけれど、ライシャワーさんの講義なども盛んに引っ張って講義をしておりました。それは日本のポリティカルサイエンスを含めた何か社会システムのような講義でした。私は、教育中心に、戦後の教育政策というようなことで、特別講義の場を作ってもらったのですが、日本から来てるといっているので、経済の関係だったか、呼び出しが来ましてね。その中で、一生懸命になってしゃべったあと、質問。「どうして日本の自動車は強いのか」っていう。（笑）これはもういきなり言われても困る。どうして日本の自動車はできが良くて、強いのか。そして、日本のその自動車の強さにアメリカが打ち勝つためには何をすればいいかと。こういう質問ですね。これは質問の中で非常に印象に残ってるのですが。

私は、たまたま読んでいた本を思い出して、それはね、日本もアメリカも、10人寄れば10人の足した力は10だ。そんなに違わない。ただ、日本とアメリカがどこが違うかって言ったら、仕事をする時には、その1+1とか0.9+1.1っていうふうにならないのでね。10人がいたら、これ全部掛け算になる。そうすると、アメリカは日本よりもできる人は余計いると。1.3の人間もいると。しかし0.7の人間もいる。そういうばらつきのある人間を10人こう掛け合わせたら、1にならない。日本は大体1だから、みんなそれ掛けていくと1になる。そこで日本の方が少し強いんだと、こう言ったのです。そしたら、ふんってわかったような顔をしながら、困ったなあというんで、それじゃあどうすればいいかと。どうすればいいか。アメリカは、その1よりも低い0.7, 0.8っていうのを大きくしろ。そ

うすると、おまえさんのところは 1.2 とか 1.3 とかかっていうのがあるのだから、下が 1 になったら、日本よりは強くなるよと。日本はどうするかって言うから、そうになったら負けられないから、日本は 1 を 1.2 にする努力を教育でしないと。それが、それぞれの国の教育の課題だと思うって話をしたら、みんな得心してね。私の英語がわかったのかわからないのか知りませんが、(笑) まあ何とかそれで得心してくれましたよ。

しかし、これも、しゃべってる途中から手挙げて質問しますからね、そのことは前から聞いてて、その質問をいちいち受けたら駄目だぞと。おまえの話がどこかへ行っちゃうよということは、日本人からも、現地でも聞かされてたわけです。学生は遠慮なく質問してくるから、その質問に対してまともに答えたら、おまえの講義がどこかへ行っちゃうという話は聞いてたけどね。いやあ、それは活発なものです。私のような下手な英語に対しても、それはえいやっとやってくるので、ちょっと待ったと言って、一生懸命書いたやつを読むんですよ。(笑) だけど、これはいい経験でした。それが、その国際的な関係ですよ。

それでは、3 ページへまいります。全国教育研究所連盟というのがあって、その冒頭に、こちらが先にできて、そして教育研究所を教育研究所に直せと言って、教育研究所連盟の旗振り役をやれというところまではお話しておきました。

ところが、私、本当は研究所の所長になって 1 年半くらいは、全国教育研究所連盟というのがあって何かやってるということあまり知らなかった。冒頭に、いきなり韓国へ引っ張られたり、ドイツへ行ったり、アメリカへ引っ張られたりしたものですから、中の人あまり話をしてくれなかったもので、わからなかったですね。

ところが、まる 1 年たった時に、山形だったと思いますが、全国教育研究所連盟の会合がありましてね。そこへ行って初めて、ああ、これは大変なことになってると感じました。というのは、平塚先生の頃は平塚先生のご威光もあったし、研究所連盟で平塚先生が旗を振っているいろいろやったペーパーはみな、各県の研究所や何か参考資料として重宝して買われたと思います。しかし、時代とともに、その研究所連盟で出してるのはストックがだんだん多くなって、売れ行きが鈍ってるわけだ。そうすると、財団だったか任意団体だったか知りませんが、研究所連盟という組織でやってるのに、こっちの世話をしてる人の人件費も出ないし、(笑) 首が回らん実態が起こってるわけですよ。

その話を聞きまして、これはえらいことだなあと。それは確かに 30 年前、発足の時は元気よく皆さんと一緒にやりになって、その頃はまだ研究とか調査とかかっていうのはある権威を持って、勢い込んで取り組んだんでしょう。しかし、だんだん時を経て、そういうものは置いてきぼりという感じがするんですね。私も、気が付いた時に、「はあ、そうか。研究所連盟っていうのは、政策に対する批判だということでみんな取り組んできたんだが、誰も相手にしてくれないペーパーばかり残ったな」と、極端に言うともそういう感じだったわけです。

それで、その世話をしてくれる人に金払うこともできないが、私が責任者になっているわけですから、それはどうやってその金を払うかも考えていかないとけない。これはえらい始末だなあと思いました。それで、要するに、研究所の各部署は、それぞれ自分の研究に忙しくてやってる。全国教育研究所連盟というシステムはできたが、その相手をしてるのは、指導普及部の 1、2 名の人たちが窓口になってやってるだけ

であって、研究所連盟の仕事と研究所の各部がやってる研究とがまたちぐはぐで関係ない。大学とも関係がなく、みんなそれぞれ自分で研究をしてますっていう姿になってるわけです。

じゃあ、全国研究所連盟というのは何だということになるわけです。それで、これは何かして少し金儲けも手伝ってやらないといけないし、いろいろと考えないと思っ、何か共同研究をやろうと。で、最初に持ち込んだのが、そのIEAと同じ高校入試の共同研究だったわけですよ。日本のその数学や理科の成績がいいとか何とかって言うけれども、その実体は、それぞれ分析していけばわかるように、計算問題に強いだけであって、事柄についてはひとつも理解が高いわけでない。どうしてかっていうのをいろいろ追っかけていくと、それはどうも教師の姿勢にも関係があるし、高校入試に関係がありそうだ。だから、高校入試が、現実には学習指導要領どころでない、学校の先生の意識を縛っているのと違うか。それをどのように研究の対象としてパラフレーズして、どういう入試問題を作ったらいいかということをお共同研究しようと呼びかけたのです。

それは、ここにそれほど書きませんでした、そのIEAでやった数学の比較分析、これをずっとやっていって、日本はどこが強くどこが弱いかっていうのを見てると、それよりももっと極端な形で高校入試にそれが出てくるのです。ですから、高校入試を取り上げて、みんなで共通で研究し、そして、どうすればいい問題になるか、どうすればカリキュラムとして役に立つものになるかを考えようと呼びかけたわけです。

ところが、これがいかんのですね。「そうそう、それはやりましょう」って、なかなか県のセンターはよう言わないです。岐阜がどうだったか知りませんが、(笑)それ

は、高校入試の試験問題というのは県教委の指導課で作ってるからです。指導課で作ったものもいいの悪いのって研究所で言ったら差し障りがあるから、そういう研究には関与しませんと。(笑)だから、教育研究所を当初作った時の趣旨と、30年経った時とまるっきりひっくり返ってるわけですよ。そして、当たり障りのない研修所になっているわけだね。県の指導課の言う通り研修所で研修をしておりますという研究所になってるわけですよ。

これも、(笑)私も、おやおやおかしなことになってるなあ。けれど、ちょうど、それでも半分ぐらい手を挙げてくれたかな。共同研究でやりました。そして、共同研究で3年間やって、国語、理科、それから社会まで含めて5教科だったかな、試験問題の分析というのをやったんですよ。本屋がちょっと算盤の読み違いで、一番最初はものすごい勢いでその高校入試問題の分析というのはよく売れたんですけれどね。(笑)本屋がミスって、少し次を読み損ねたものだから、すっかり顎を出しちゃって。(笑)そのうちに、だんだんだんだん入試問題というのは、それぞれ旺文社なり何なりがうまいものを出してますよね。けれども、あれは研究という立場からのものじゃないです。

で、皆さんのところへ差し上げた3番目のですね。これは、あとで読んでいただければわかりますが、「学習指導要領・入試と教師の教育責任」で、学級での教師の教育指導というのは一体何だと、それは何によって起こってるのかということをもう少し考えてもらわないといけません。その冒頭に、この「アメリカ人が見た日本の教育」という座談会で、学校経営の記事のことを言っておりますが、その正面にも書いてますが、道徳教育のその価値はというと、「文部省から教えられてます」と、こういう答え

が上げられている。「学習指導要領にあります」と、こういう言葉が返ってくる。教師は自分がこう思うということをひと言も言わないっていう、このアメリカの教育視察団の教員の報告があります。それをきっかけにして、一体数学や何かでどういう問題がどういうふうに出てどうなってるのということを書いて、一体これを直すのには誰がどうすればいいんだと、私のちょっと義憤に近い問題意識を書いたのがこのペーパーです。

ここは、私自身もどうしたらいいのかっていうのは本当はよくわかりませんが、大体教育研究所にいる時に都研の参与というのをやらされてね、都研の会議で、時々都の研究所の人たちのやってることを聞かされたことがあるわけです。そうすると、驚いたことに、文部省があって、学習指導要領があって、それで都に下がってきて、都の指導方針があって、区の指導方針があって、それで学校ではこういうふうに教育をしていますという説明をしてくれるわけです。都研の人が。それで、僕は、そんなおかしい話ないぞと。教室に先生が入ったら、まず子供の顔色を見るのが第一と違うの。そして、子供を相手に何をしゃべったらどうなるかということがその次に来ることじゃないですか。文部省も東京都も関係ないでしょう、と、こう言ったら、指導主事の人たちはびっくりしたような顔をするわけですよ。(笑)

そこは発想が本当におかしいと思うのですよ。学習指導要領っていうのは、子供を相手にものを言っているところやとりをした結果が、大体この辺まで行ってるかなあと反省材料に過ぎないんであって、それを教えるなんていうことはあるはずですよ。ですから、書いてあったって、これを教えるなんていうことを書いてるとは、僕は思わないけど。しかし、私

はカリキュラムの関係はそうやらなかったから、カリキュラムの指導要領というのは一つのスタンダードを書いただけなんで、実際に教育活動というのは教室に入ったらそのクラスの子供の顔色から始まるのと違うかって聞いたら、びっくりしたようなことを言う。だけど、そこが基本的にその責任の所在としてひっくり返ってると思えますよ。それが、あらゆることにみんな出てくる。入試問題とか何とかっていうようなことにね。

で、私もついそれはむかむかしながら、(笑)その文章を書いたんです。これ、一体、誰が教育してるつもりなんだ、鸚鵡じゃあるまいし、っていうのが、そのペーパーでございます。教育研究所の人たちと共同研究をするといったって、何かその実態を見て具合の悪いことがあったら、調査研究によって改善するという意識が何も出てこない。だけど、これは実際時代の変化だとはいいながら、全く困ったことだなと思います。ところが、どうも横から聞いていると、文部省の指導課長会議で文部省の担当者は「こうやるんだ」「ああやるんだ」ということばかり言ってるらしいですね。時々、私が研究所にいるものですから、気軽になって、その指導部課長会議でこんなことがありましたけどねとかって、こっちに言ってくれます。(笑)それで、何かあんまり力んでものを言ってるなあという感じもしないでもないけど。やっぱり、その立場立場で人に対するものの言い方が違うでしょうが。どうも制度にないことが現実のシステムとして動いてるなあということを感じますね。そして、各県と国の教育研究所とのあり方も含めて、教育行政の現実に対する教育研究というものがしぼんでるというふうに感じる。本当はもう少し意味のある研究をし、意味のあるコメントをして、そして実際に実践をする人たちが「そ

うか」っていうことで直すような気風でない、それは研究というのは役立たないことをやってるということになる。

事実、これの冒頭にも書きましたけれども、タイムラグがあつてうまく合わない。役所の方はすぐ「これがないか」「あれがないか」「これはどうなってる」と尋ねる。研究でやろうとすると、どうしたって暇がかかりますからね。だから、もう少しその視点を遠くに置いて、長期の動向を考えながら、何を本当に考えないといけないかと研究の視点を遠くしないとイケない。そこにも書きましたけれども、非行少年、学校紛争というのが、私の在任期間の最後のところで大きく出てきました。臨教審の臨時専門委員にもならされて、議論を少し聞いたりしておりましたけれども、そうすると、その学校の紛争とか何とかがついているものの実態を把握するということになる。ところが、これが役所でもできないですよ。教育委員会から表向きの報告だけはもらってますよね。しかし、どうしてこの学校でこういうことが起こって、どこに本当の問題があるかっていった、個別にもっと実態を聞いて回る調査が本当は必要だ。だから、個を知ることでですね。個別の、個々の事例をよく知るといって調査を本当はしていないとイケない。

それが、今、子供の問題でも起こってるんで。子供の問題だって、一般論で議論をしちゃあ突拍子もない子供が出てきたって、「それはわからん」でおしまいになる。どうしてもこれからは、子供の相手をする時に、個を相手にして、個を真剣に見つめていくということをしなないとイケない。だから、いろいろな事件が起こった時にも、そこをじっと見つめていくことをしていく。それをストックし、いろんな類型を考えて議論しながら、当局側に、「こういうことは気を付けないとイケないじゃないの」とい

うことを言わないとイケない。教育研究というものと行政施策というものがどうしたら噛み合うか。教育委員会の方は、「批評なんかされたらどうもならん。俺の言うことだけ宣伝してくれ」というような教育研究所にしてるし、国の場合だって、「所長、そんなことを言ったら、文部省で予算削られますよ」って言うからね。どうもその発想がやっぱり具合悪いことになっている。ここで、もう一遍、教育研究所の発足の当初に帰って、反省と批判というもののない行政は施策として間違いという認識をみんなが持って、おおらかに、しかし真剣に、個別の事例を考えるというふうにしていかなければと思うのです。

全教連と、どうしたら一緒に仕事ができるか。もう一つ困るのは、私が7年間いる間に、相手の所長はみんなと言っていいぐらい、全部変わってしまった。最近、所長というのが腰掛けになってしまっているわけです。文部省の人事も県の人事もひどすぎる。(笑)私が7年間教育研究所長をしてる間に、相手がみんな変わってしまう。そしたら、一緒に仕事をするということができません。

あと、研究所長在任中、臨時教育審議会をやりました、国民生活審議会、経済審議会、学術審議会、海外移住審議会、いろいろとお付き合いさせてもらいましたということを書いてますが、一つだけ、臨教審で私が一番意地を張ったのは、学年の始期を変えたいということでした。大体臨時教育審議会を総理が招集して内閣が直せることというのは、そのくらいしかありませんよ。学校の修業年限を変えるか、学校の活動の始期を変えるか、そのくらいしか、政府ができることはないです。あとはみんな学校でやっていることです。地方です。それを、中曾根さんは、まあこれもちよっと用語を注意して言わないとイケない

けれど、(笑) 校内暴力があり、家庭内暴力があり、爺さまを殴り殺すような家庭もあって、「こんな荒れた学校なんて、これは教育制度の責任です。申し訳ありません。ひとつ、審議会の皆さん、真剣に議論をして、ここをこう直せと言ってきてください。私がすぐに直します」と言われる。自分の子供でさえもよう直さないのにねえ。(笑) ひとつの子供が簡単に直るわけがない。

政府が何ができるかって言ったら、政府は制度の改新しかないです。制度しかないんだから、私は、この際、みんなに気分を一新させるために、是非学年の始期は9月。それをやらなければ気分が一新しないと思ったから、執拗に、私はこの第1部会で「もう変えろ」と主張しました。そうすると、このくらい金がかかるという。あの改革の悪いところは、教育改革をするけれども金を出さんと言う。(笑) 金がかかることはお止めなさいと言う。(笑) 学年の始期を変えることなんていうのは、そんな金はかからないですよ。ところが文部省も反対だから、これだけ金がかかるということを言う。学年の始期を延ばすぐらいのこと、何も関係ない。空白にしとけばいいです。

政府としてできないことに口を入れて、「やれ」「やれ」って号令してるだけじゃあ、それは動きません。学年の始期のように、国がこうするって言ったらこうなっちゃうことを変えればいいのです。そうすればものごとは動くと思うのですが。

誰も、自分がやろうっていうことを考えないから。今の政治改革、行政改革、みんなそう思えます。実際、評論家的な意見ばかり言っている。本当に、こうしたらこうという、できることをできる範囲でぴしっとやるということにしなければ。

【梶山】 これは、この年、経済同友会の教育問題委員会ですか。あれが9月に新学期ということを行いましたね。

【木田】 ええ。

【梶山】 しかし、その経済同友会が言ってるにもかかわらず、それが一番通らなかったですね。

【木田】 ええ、そうです。あの時に、財界の人と僕と一生懸命になった。一番反対したのは高等学校長ね。(笑) そんなことをしたら、春の高校総体どうしますかと。(笑) 馬鹿な議論を、われわれの前へ来てね。そんなことをやったら、夏の野球とか何とかね、ああいうスポーツが高校の体育でなくなりますとか。そんなことはどっちだっていいじゃないですか。卒業しても、卒業した年度は選手でありうるぐらいにしとけばいいですよ。そういうことを言って、一生懸命になって反対してましたよ。

大学の先生は、ひとごとみたいにきょとんとしたな。(笑) 僕は、大学は、本当に夏にゆっくりと休みをとって新学年に対応する方がいいと思う。一番それを感じましたのは、この前もお話したかも知れないけれども、大学だけじゃないですが、日本の学年の始期と同じように世界中の日本人学校が行動する。私は4月の初めにブエノスにいたことがあります。そしたら、向こうの領事館の人が、「きょうは日本から飛行機に乗って、90人ばかり学校の先生と家族が来ます」。ブラジルの中に日本人学校たくさんあるわけです。3年で一遍交代しようしますと、4月1日に家族を連れて、どっと先生がやってくるのです。来た方も乗り継いでそのまま来てるわけですからね。日本から、ブラジル航空に乗って。それは初めて飛行機に乗って、子供を連れて、(笑) サンパウロへ着いて、それで、4月1日から新学年ですなんて無理な話で。ブラジルみたいなでかい国では、そこから、また飛行機で国内線乗り継いで任地へ行くわけでしょう。それを領事館の人が、「こっちです、こっちです」って世話してるわけで

す。

私は、3月末の各県の人事異動からして、こんなことじゃあとってもいけないと思うのですが、大体学校の先生が1万人いたらどんなに少なくても1割は異動します。それが3月28日から4月1日までの間に異動する。今は車だけで、行き先が変わるだけでも知れませんが、しかし、校長さんから何から全部新顔で集まって、そして、それはいろんなことをやるけれども、あれだったら、夏休みに校長が変わり、教頭が変わり、クラス担任は次はこうなるよと、次の新学年の準備はこうするよという準備が十分できるのに、今のやり方では準備をしないで、そのまま引き継ぐように、3月末から4月初めに走る。こんなことをいつまで続けるのかと思います。

それで、今度は私学、大学を聞いてますと、1月から3月までは授業になってないですよ。私も時間講師を務めたことがありますからね。1月からの3学期は、2週間、2回講義ができればいい方だ。そんな講義で何が、と思いますよ。ところが、誰もそれを疑問に感じてくださらないというのは、これは不思議だなあと感じてしょうがない。3学期はもう試験だけっていうのだったら、それは夏休みに、7月、8月試験だけやってけばいいじゃないかと。一番いい時期につまみ食いみたいな授業をやってね。で、国立大学だって、これは授業になってないと思います。入試で騒いで。だから、これは9月に変えたら、どんなに流れが順調になるかっていうふうに思いますかね。「臨教審で議論することはこのことだけだ」って言ったのだけでも、(笑)駄目でした。

それで、調査もしています。しかし、臨教審が始まってから調査するから、終わったあとに調査結果が出てくるっていうのは、これも。(笑)

それから、今まで、審議会としてかなり前向きに積極的な議論が出たと思うのは、経済審議会で、昭和62年から、私は経済審議会の委員になっておりますが、実は昭和40年、30何年かな、私は担当課長で、大来さんと一緒に「所得倍増計画」とそれに続く「経済発展における人的能力開発の課題と対策」という経済審議会の答申に取り組みました。

大来さんという人は、戦後の日本の所得倍増計画から始まった大きな経済政策の流れと、その経済政策に対して日本の国民の労働力がどういうふうに移動するか動いていくべきか、学歴水準がどういうふうにならないといけないか、ということを長期の視点で見てもらいました。

ところが、それ以後、この経済審議会というのは、困ったことにみんな短期の議論をしています。短期の議論をしますと、一番抜けるのは人口問題です。その次に教育問題が抜けるんです。あと3年間とか5年間の経済をどうするかという時には、人口はもうすでに決まっている。だから、もうずっと20年も30年も前から、日本の人口はずうっと減少して、先々どこまで落ちるのかわからないことになりますよということとはわかってても、誰もそれを経済計画としては論議しない。国民生活の審議会としても論議しない。これはやっぱり視点が短すぎるから。長期で考えた時に、やっぱりこういう問題では人口問題が最大の問題であり、それに対して教育をどう考えるかという問題が、その長期の問題として入ってくるのですが。短期の議論をしますと、3年間や5年間の議論では、教育にもならないです。人口問題もならないです。ただ、子供が少なくなっていく見込みですって書いてあるだけです。それをどうやったらどうなるかっていう政策的な判断は、長期の視野を加えなければ出てきません。その意

味では、私は昭和 30 年代の政府の人的能力政策ということを出した時の方が、政策としてはまともであったと思います。

それから、学会・財団等とお付き合い。これは、いろんな意味でやっぱり勉強になりました。教育行政学会、比較教育学会、異文化教育学会、生命倫理学会、統計研究会、外国語教育振興会、教育情報学会とかね。何か学会だか学会でないのかわからないようなものをいろいろ含めまして、いろいろと仲間に入れていただいたり、役を仰せつかったりして、実情を認識させていただいてます。しかし、本当に学会という点から行くと、人文の学会は事務の体制をどうするかということを考えない限り、学会活動が強くなれないと思いますね。これは、私の関係してる教育行政学会とか比較教育学会、その辺のところの経験だけで、決して心理学会だとか教育学会全体の大きいところだったらそうでないのかも知れませんが、しかし、2,3 年経つと会長さんが変わりました、事務の方も一緒にごそごそと変わっていきます、引き継ぎだけはやっておりますというだけで、何も学会としての強い視点とか狙いとかっていうのは出てこないわけですね。これでは学会が強くなれない。だから、自然系では、小さい学会もお困りですけど、やっぱり物理学会にしても化学会にしても、生物学会にしても、かなり大きいのがあって、旗振られますね。ところが、人文系は大きい学会はもぬけの殻みたいになってる。名前はあっても、実態としては細分化の方向へばかり行きます。細分化は必要があればいいけれども、どうマネージするかという体制が人文の学会を見てますと非常に弱いですね。私は、今学会事務センターの、副会長の役を仰せつかったから、学会事務センターが何百ほどの学会の世話をどういうふうにしてるかというペーパーを貰ってます。

それは、お金との相談になるわけですけど、やっぱりここを上手に使っておられるところが、そのマネージメントがうまくいってるという感じはします。統計研究会というところにもちょっとお付き合いをしました。12 年ほど理事をやりましたが、これはもう国際経済学会だとかいろんな学会が、その財団は、かなりしっかりした財団ですけども、そこを足場にして相当いい仕事を積極的にされますね。それから、教育関係、人文関係の学会というのを、どうしたらもう少し強くできるか。今比較的動いてますのは、日本心理臨床学会か。これは 5000 人ぐらいの大きさですね。時流に乗ってるせいもあるけれども、相当大きな動きがあります。

ですから、何かこう、確かに学会が、こう見てますと、それぞれ自分の特色を立てて割れていく方向にだけあるけれど、もう少し全体のマネージメントを上手にするという方向でやっていただかないといけないのでないかという気がします。後藤先生とご一緒にしてます教育情報学会なんかを見てましても、私も会長だなんておっしゃっていただいているけれども、どうしたら力強い活動になるかというのは始終頭にあります。(笑)これは教育研究所とそう関係あることじゃないけれども、いろんな学会とお付き合いというので、うまくいってる場所、いってないところ、いろいろあるので、私も学会の事務体制をどういうふうにするかというのが、乱暴ですけども、共通した課題だと思ってます。

それで、そのようなことを含めて、教育研究所で学びえたことで、二つだけ教育改善における教育研究というもの役割をどういうふうにするかという問題と、そして、教育と医療ということで、これは私が教育研究所におりました時の教育に対する見方がございます。たまたま、富山医科薬

科大学の当時の学長をやっていた佐々先生というのが教育研究所へ来られまして、10周年の時の何かこう話をしろというので、私もへえっと思いましたが、お医者さんの前で10周年の話、何か記念になる話というので、少し教育研究所の体験をもとに多少勉強させてもらいました。参考文献がその一番おしまいに書いてありますので。そんなことで勉強した結果、教育というのは何かっていうことを私なりに考えたことを書いておきましたので、これもまたあとでご覧になっていただければと思います。

ありがとうございました。